秋田さきがけ
昭和60年（1985年）6月3日　月曜日　（6）

私の主張提言

21世紀へ七カ条

佐々木　正光

今「まごころ秋田」キャンペーンが展開され、それなりの交通網の整備の効果もあって全国規模の各種大会も頻繁に開催され、秋田を知ってもらう機会が増えたことは大いに喜ばしいことである。

本県は何もなく、人口の減り続けるだけの暗い所では決してない。六郷、湯沢の湧水（ゆうすい）も名水百選に取り上げられ、秋田の酒は日本一だとも思っている。その酒の元となる水は単に自然にわき出ているのではなく、山々の木々の緑があってこそ一年中私たちのどを潤し、田んぼに注ぎこまれては「あきたこまち」などのおいしい米づくりの元となっているのである。それに米代川や雄物川により、きれいな水道水にも恵まれている。このおいしい水を守ることは、木々や草花を大事にすることであり、秋田の豊かな自然を守ることで得られることを、私たちはもっと認識すべきだと思う。

二十一世紀はあと十五年すれば確実にやってくる。そのときに秋田の過疎に憂いを唱えるのではなく、秋田の水に誇りを持ち、いつまでもおいしい米や山菜の食べられる〝田舎〟であらねばならない。秋田美人のルーツは、おいしい水（ミネラル水）ときれいな空気にあるのであり、素肌美人はすなわち自然美の女性をいうと思う。その自然美の女性が少なくなり、近ごろは女子中学生までもが化粧品を使って、けばけばしい人工美で装っているのを見ると、一抹の寂しさを覚えるのである。

本県の二十一世紀は、第一に人口を増やすことだと考える。その目標として次の七カ条を提言する。

①秋田美人を復活させ、県外の男性が秋田に住みたいと思うようにする②減反で草ぼうぼうの田んぼを各農家が開放し、手作りの野菜を全国の県内出身者に送り、秋田の味を通して今一度、ふるさとを見直してもらう。※それで十、二十年後に本県出身の子供や孫たちが秋田に定住すれば、将来の基礎づくりにもなる③秋大医学部出身者は県内の無医村を解消すべく、五、六人のチームで全県に展開し、健康について万全の態勢をとる④過疎による児童減少でも学校の統廃合をせず、地域総合センターとしての機能を与え、医・食・住についてきめ細かい住民サービスをする⑤全県八市への人口集中を避け、都市生活者は山村生活者、すなわちおいしい水を守る人へ「緑の基金」として一定額を支出する⑥都市部と山村の学校の児童・生徒を一定期間、相互に〝留学〟させて、お互いの理解を深める⑦県民一人ひとりが自分の手で野菜を作って食べる。

以上「秋田しあわせ七カ条」を実施すれば、来るべき二十一世紀は真に地方の時代の盟主となり、子供たち、孫たちに秋田に住み続けたいという意欲をもたせ、同時に県民一人ひとりが真にしあわせでありたいと思う日々の積み重ねが、やがて本県の人口増を実現するものと確信する。少なくとも、私は自ら実践していきたい。

（西仙北町刈和野・秋田カエル村代表）

No.18